

人の体には、インスリンや甲状腺ホルモン、成長ホルモン等多くのホルモンが働く、甲状腺は、甲状腺ホルモンを分泌し、蓄え、必要に応じて血液中に分泌する臓器。

甲状腺ホルモンは子供の成長に関わり、大人になってからは主に、体の新陳代謝の調節を行う。即ち、体のエネルギーを上げる働きをする。

女性は、更年期以降、女性ホルモンは減少するが、甲状腺ホルモンは生涯分泌する。また、甲状腺ホルモンの分泌量を調整するには、脳下垂体から甲状腺刺激ホルモンが分泌される。

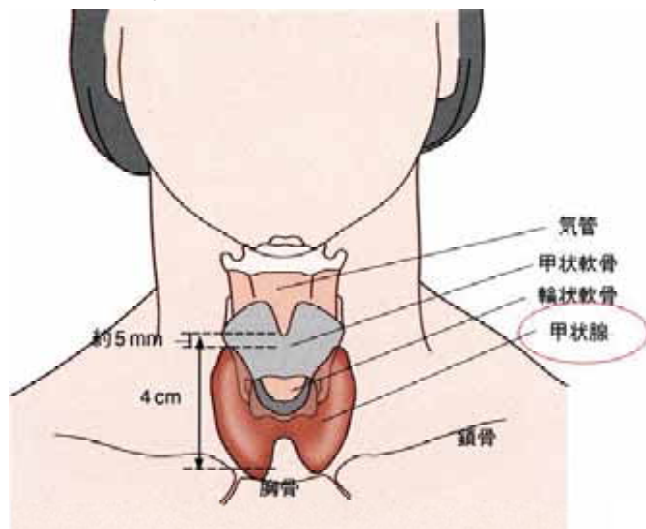
甲状腺ホルモンの分泌量は、ストレスなどにも影響されるが、基本的には常に一定量を供給している。

分泌量が多すぎると、「甲状腺機能亢進症」になり、

不足すると「甲状腺期の低下」になる。

甲状腺機能亢進症になると、体のエネルギーを無駄に使うので、疲れやすくなる。

甲状腺機能低下症は、逆にエネルギーが出ないので、元気がなくなる。



この甲状腺に悪性の腫瘍ができ癌になるのだが、甲状腺癌の初期症状は、甲状腺全体が腫れ上がるようになり、甲状腺内部にこぶのようなモノができて、具体的にはエンドク豆よりも小さな、注意しないと判らない位の程度であり、痛みがなく、なんとなく体調不良で見過ごしてしまうケースが多いようです。

甲状腺癌の発症の原因は何か？はっきりした原因は突き止められておりませんが、喫煙が最大の原因とされてきました。

ところが異変が起きました。1990年以降、ベラルーシ、ウクライナ、ロシアの三ヶ国ににおける小児甲状腺癌の著しい増加という共通の現象が確認され、1995年末までに、この三ヶ国で約800名の小児が甲状腺癌の治療を受け、その半数以上の508名がベラルーシ共和国内で発見され、外科治療を受けた。

ベラルーシ全土において、原発事

故前11年間で僅か7名の発症であったのが、事故後11年間で508名と事故前に比べ72.6倍に急増したのだから、誰もが原発事故との因果関係を疑うのは当然ですが、各政府とも低線量被曝の甲状腺癌と自然発生の甲状腺癌の症例との違いが立証されなかったため、調査には消極的でした。

ところが低線量被曝と癌発症の因果関係は認められないとする見解を覆す、画期的な遺

